

安藤俊雄先生を偲ぶ



略歴

- 明治四十二年十月十二日愛知県渥美郡田原町に生れる
- 昭和二年三月 大谷中学校修了
- 昭和五年三月 大谷大学予科修了
- 昭和八年三月 九州大学法文学部哲学科卒業
- 昭和十一年三月 京都大学文学部大学院修了
- 昭和十一年四月 大谷大学専門部嘱託教授
- 昭和十二年四月 真宗専門学校教授
- 昭和二十五年四月 東海同朋大学教授
- 昭和二十八年四月 大谷大学文学部専任講師・京都大学講師
- 昭和三十一年四月 大谷大学文学部教授
- 昭和三十五年九月 大谷大学学生部長兼任
- 昭和四十一年四月 大谷大学学監・文学部長兼任
- 昭和四十五年十一月 大谷大学長・短期大学部学長兼任
- 昭和四十八年十二月二十六日逝去
- 正五位勲三等瑞宝章

大谷大学長 故安藤俊雄氏を偲ぶ

本学教授 横 超 慧 日

人間として生まれた限り、誰でも与えられた一生を信念を以て自己に忠実に行動し、精一杯の努力をつづけて生きぬくことが大切であろう。畏友安藤俊雄兄は、卓見を以てするに、確かにそうした生き方に徹し、その意味で悔のない生涯を終えられた人であると思う。

兄は愛知県渥美郡野田町の人。若い時大谷中学を経て大谷大学予科に学ばれた。それは生家が安楽寺という真宗大谷派の寺であり、仏法を学び人にも伝えることを勤めとする家庭に育たれたのに由るのであろう。大谷大学と兄との結びつきはその時に始まる。大谷大学で予科を了えるや、思う所あり九州大学法文学部に転じ、そこで宗教学を専攻された。九大を卒業してからは京都大学の大学院に入られた。一つの大学で直線コースを進むよりは、選択して異なる学風に接しつつ自分の進路を追求してゆくというのが方針であったようである。兄が宗教学者の滝沢克巳氏や後に大谷派の宗務総長となった星谷慶縁氏等と親しい交際を持たれるようになったのは、九州大学時代の友人という関係のためであった。

私は兄の業績を、学問の上からと職務の上からと、両面におい

て輝しいものであったことと思う。学問としては中国の天台学を専攻して独自の境地を開拓せられた。職務としては学園危機の渦中にあった大谷大学を、一身を挺じて指導せられたことである。

言うまでもなく天台学は中国仏教の一大精華であり、また日本仏教の宗家の学ともいふべきものである。従ってわが国では昔も今も、ひとり天台宗だけでなく仏教系のあらゆる学場でこれを重視せぬ所はないが、兄は大谷大学においてのその伝統を守った人であった。前に大谷大学には上杉文秀先生がおられ、「日本天台史」の研究を以て不朽の功績を挙げられた。それは周知の通りである。兄はその後を継いで中国天台史の研究において、右に出るものない権威者となられた。兄は京大の大学院で学んだ後、東海同朋大学に教鞭を執られたが、昔大谷大学で天台学を講じておられた稲葉円成先生がその頃同朋大学の学長をしておられたので、個人的に稲葉先生について天台学を学ばれたのである。そしてその第一の成果が「天台性具思想論」であり、その後「天台思想史」・「天台学―根本思想とその展開」等と次々に貴重な著作が発表せられ、学界に確乎たる地位を築かれた。天台学の中でも、最も複雑な学派抗争の歴史をたどる趙宋以後の中国天台の研究に至っては正にその独壇場ともいふべきもので、禅や華嚴との交渉により頗る錯綜を極めた思想界に明快なメスを入れられた功績は永く後世に記念されるであろう。

ここで兄と私との関係に触れて兄が大谷大学へ迎えられることになった事情を述べておきたい。大谷大学では、昭和二十四年から新制大学としての発足を始めた。それまで東京の東洋文化研究所にいた私は、その機会に大谷大学に招かれ中国仏教の講義を担

当することになった。当時谷大の仏教学科には原始仏教及び俱舎学に舟橋一哉氏があり、中観及び唯識等のインド大乘には学界の重鎮山口益先生がおられた。そして中国仏教の關係では、山田亮賢氏がいて華嚴学を専門としておられた。これに對して私は元來、中国仏教を一乘思想の展開ということを中心に研究していたので、隋唐時代興起の諸宗よりはむしろ華嚴・唯識・三論・天台と溯つて、それら諸宗の源流を南北朝時代に求めて歴史的に研究していたのである。ところが大谷大学では伝統的に天台・華嚴・俱舎・唯識をどの一つも欠かせぬ重要な柱として重んじてきている。そこで諸宗の中では一番天台に研究関心を寄せていた關係上、私は天台を担当することになったのである。講座が四つに分けられて、原始仏教を第一とし、インド大乘を第二とし、華嚴を第三とし、そして天台を第四講座とすることになった。しかし安藤兄が天台学で着々業績を挙げるに及び、天台学を専門とする学者を迎えたいとの機運がたかまり、かくて昭和三十一年安藤兄が大谷大学教授として迎えられることになったのである。私は大乘諸経論を中心に初期天台までの古い所を専門とする。安藤兄は趙宋以後の發展天台を専門とする。このようにしてその後講座制が廃止せられて以來も、われわれ二人はひきつづき同じ研究室に机を持ち、学問の専門的意見の交換はもとよりのこと、私的交際においても密接な間柄となったのである。

さて大学での職務として、学生部長や文学部長の任に就くことは、兄と私が互に先となり後となつて助け合つた。しかし何よりも兄の力量が最大に發揮せられたのは、昭和四十四年以後の学園紛争の時である。学生運動が熾烈化して紛争の收拾が困難に陥

つた結果、谷大は一年余にわたり学長不在のまま運営委員の制度という教育の非常態勢をとらねばならなかった。そうした中において、兄は第一回の運営委員七人の中に選ばれ、最後にはまた第五回の運営委員長として事態の解決を託された。その頃の苦心は、まことに悲壮の極みであつた。しかし難局打開に率先して尽力せられた結果、曙光はついに見えはじめて、信頼の集まるところ、兄は選ばれて紛争勃発後最初の学長として選任せられることになったのである。当時その事に与つた者の一人として、私は回想の種尽きぬものがあるけれども、今はそれを略する。ただ学長の職に在ること三年、戦場に疾駆して中国の南岳にも詣でたことのあると自ら健康を自負しておられた兄が、はからずも病を得て今や不帰の客となられた。あれほど混乱を極めた大学を今日の平静に復帰させた功績は、大学のある限り忘れられることはないであらう。それを仕遂げた兄の不屈の信念と、鋭い識見と、その上たゆまぬ忍耐努力とは、私の心から敬慕の念を禁じ得ない所である。

安藤先生の天台学

本学助教授 福島 光 哉

「今夜から明朝にかけて、恐らく最大の危機でしょう。」という主治医の宣告を伝え聞いたのは、昨年十二月二十一日のことであった。それから数日間、強靱な先生の心臓はしっかりと鼓動し続けたので、我々も医師の診断に反して再びお元気になれることを念願し続けていた。しかし、家族・親族の方々の精一杯のご看護にも拘らず、二十六日深更先生は静かに大往生を遂げられたのである。息を引き取られる時のあの優しい安心し切ったような先生のお姿は、今も私の脳裡にはっきりと刻みつけられている。

先生の急逝はまことに惜しい悲しい出来事であったことは云うまでもない。そして何よりも重要なことは、我々に幾多の問題を残していかれたことであろう。そのうち学長としての先生については、多くの人々によく知られているところであり、今後もし色々な角度から学長としての業績を通して先生のご人格を振り返ることがあると思われるので、ここでは天台学者としての先生について振り返ってみようと思う。

先生は九州大学文学部から京都大学大学院に学ばれた時代には宗教哲学を専攻せられ、この間に主としてヘーゲルなどを研究せられたようである。そしてたまたま京大時代に上杉文秀先生の天

台の講義を聞いて非常に興味を覚えたものだと思われたことがあった。したがってその頃から天台独特の論理（先生はそれを天台弁証法と云われる）に強い関心を抱かれたことが、天台学に転向される動機の一つであったようである。そして真宗専門学校の教授時代に稲葉円成先生について中国天台を本格的に学ばれ、稲葉先生の要請によって一年間かけて天台概論のノートを作ったといわれる。その為に先生は天台三大部を中心に中国天台の教相と観心を身につけられて、天台学の専門家としてスタートされた。若い頃、稲葉先生からしばしば注意されたことは、西洋哲学の論理をもって安易に天台の論理を解釈してはならないということであったそうであるが、当時の先生の論文、たとえば「智顗の実相論」や「絶待止観」を拝見すると、随所に西洋哲学研究の跡がにじみ出ていて非常に興味深い。のみならずこの頃の天台の論理を追求する方法が、先生の生涯に一貫した研究姿勢であったように思える。

先生の天台学を代表するもの、安藤天台学と云われるものは周知の如く「天台性具思想論」と「天台思想史」である。この両著は中国の原始天台より唐宋時代を経て、明代に至るまでの天台を中心とする仏教の思想史であるが、前著においては主として天台と華嚴の思想上の対決、後著にては禅と天台との対決をその中心課題とするものであった。先生の思想史研究は決して天台内部だけの思想を取りあげるのではなく、天台の実相論が華嚴なり禅なりのいささか唯心論的傾向をもつ学派に対して、どこまでも天台独自の性具思想を強調していった過程を明確にすることであった。そしてこれら他学派の影響の下に、天台内部における思想上の葛

藤・分裂・発展を克明に書き出すところに、先生の豊かな哲学的思索が存分に発揮され、読者にページを送るごとに深い感銘を与えるものである。先生は教壇の上でもしばしば山家・山外の論争にふれ、思想の探究にはいつも対決する相手がなくてはならない、天台思想が発展した時期はいつも他宗との厳しい対決を経験しているときだ、という意味のことを話された。そして、対決といっても対決する相手とどこかで通じ合えるものがなくては無意味だよ、とも云われたものである。私が先生に師事するようになったのは昭和三十五年であるが、先生はその頃から学生部長、文学部長、更には運営委員長、学長と歴任され、その間、一日一日が対決・決断の日とも云える緊張の連続であっただけに、この言葉には一層重みを感じるのである。

一方、仏教学界において話題となったものに、如来性悪説をめぐる前龍谷大学教授の佐藤哲英先生との論争がある。これは如来に性悪を有するという天台独自の思想について、これを天台智顗の創説とする安藤説と、智顗の高弟である章安灌頂の創説とする佐藤説をめぐって両先生が互いに強く主張されたものであった。佐藤先生のは精密に文献学的にこれを確かめられて出された結論であったが、安藤先生はこれを智顗自身の思想体系から必然的に導き出されねばならない重要な法門であるとの立場であった。このようなことから、後学の我々には両先生の主張せられるそれぞれの結論よりも、両先生の異なる天台学の方法論そのものに大いに関心を抱いたものである。この論争は安藤先生の研究方法なり研究態度を知る上に、まことに好個な学説の一つであり、またこの態度は先生の天台学を貫いている精神でもあるといつてよいであ

ろう。

先生がご自身の最後の研究課題としておられたのは浄土教であった。けれどもこの研究について遂に完成を見ることができなかったことは、我々にとって最も残念なことである。しかし先生の浄土教は、昭和四十二年安居のときに講ぜられた四明知礼の観經疏妙宗鈔に関する研究に、その真髓を伺うことができると思う。唐宋時代飛躍的に発展した善導系の浄土教に対して、知礼は天台の伝統的な立場を死守して拮抗し、それを彼は生仏不二・本性弥陀・唯心浄土という天台流の浄土教、云い換えれば徹底的な人間改革を主張する法華経の浄土教として完成させていったのであるが、先生はその知礼浄土教の思想史的経過を明らかにされた。そして先生はこういう知礼の法華仏教を親鸞の浄土教の対極と考えられ、そういう意味で親鸞の浄土教は、天台智顗以来の浄土教の課題を全く正反対の解答をもって完成させたと云い得るだろうと話されたことがあった。また先生は時折り、仏教を安易に無神論であると考える誤まりを指摘されたが、それは内在から超越への仏身観を確立すべく摸索しておられたからであらう。先生が最近になってキリスト教神学に強い関心をもたれたのも、恐らくキリスト教の超越的な人格神の思想が、何らかの形で先生の浄土教研究に示唆を与えるものであったからと思われるのである。

また最近の研究の中でとくに注目されるのは、「治病方としての天台止観」という論文であらう。それによると、智顗は止観体系の中に伝統的な漢方医学の方法を取り入れているが、ここに見られる彼の心理分析が近代的性格を有することを指摘され、智顗の心理主義にも病理主義にも束縛されない精神医学が、フランク

ルのロゴテラビーにも対応するのではないかと提唱されている。

以上、安藤先生の天台学を振り返ってみたわけであるが、このように先生は学問に対して厳しかったというだけでなく、学問のテーマと内容そのものに常に厳しいものを求められた。そして智顗なり知礼なりの内面的な思想と先生自身が対決していくような研究方法をとられた。しかし同時に先生は、天台のテキストによりながらいつの間にか天台を忘れられたような一面もあった。演習の時間に「摩訶止観」のテキストを前にしながら、このテキストを忘れて滔々と禅僧のエピソードを語られる時など、先生自身が禅僧じみて来て、茫洋としてつかみ所のない不思議な魅力を感じさせられたものである。その時には最早、思想上の対決というような堅苦しいものでなく、目前の学生もテキストの撰述者智顗も、すべて先生の中に一つに包み込まれたような広大な世界を思索しておられるようであった。このように先生の学問思想は、厳格な対決と同時にすべてを包容していくという、不思議な思索の賜物であるといつてよいであろう。これこそ先生のお好きな言葉

「敵対的相即」の実践であったのであろうか。

先生の研究業績と学的精神については、今日の段階において充分これを論じ尽くせるものではない。それはむしろ先生の思索の跡を今一度辿りながら、仏教学の広い発展を考慮する中で明らかにされるものであると思う。

〔主要著書〕

天台性具思想論	昭和二十八年	法藏館
天台思想史	昭和三十四年	法藏館
慧遠研究（遺文編）（共編）	昭和三十五年	創文社
仏教学序説（共著）	昭和三十六年	平楽寺書店
仏陀のおしえ	昭和三十八年	法藏館
観無量寿経疏妙宗鈔概論	昭和四十二年	真宗大谷派 宗務所出版部
天台学―根本思想とその展開―	昭和四十三年	平楽寺書店
最澄（日本思想体系第五卷）	昭和四十九年	岩波書店
他に中国天台を中心とする仏教学関係論文多数		